

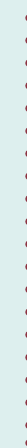
哲学歴史学専攻

哲学

日本史学

東洋史学

西洋史学



人材育成の目標

人間の社会と文化の構造・発展を明らかにし、人間のあり方を歴史と文化のなかに追求することを目的とする。人間文化の基礎を研究する哲学と歴史学を統合した教育研究体制を備えることで、人間の社会とその文化の本質と普遍的価値、さらにその変容を明らかにすることを目指す。専門分野への深い知識に加えて、関連分野にも視野を広げられる研究者、広い知識と教養をもった専門職業人を養成する。

哲学専修

哲学歴史学専攻

専修紹介

本専修は、狭義の哲学、倫理学、宗教学、美学といった、さまざまな哲学的諸領域をまんべんなくカバーする教員をバランスよく配置しており、ほぼどのような主題についての研究を目指す人でも、適切な指導を受けることができる体制を整えている。

狭義の哲学の分野には、存在論、形而上学、論理学、認識論といった、古来西洋哲学の歴史の中で哲学的諸学の基礎をなす学とされてきた諸領域が含まれるとともに、科学哲学、心の哲学、言語哲学など、哲学のなかの新しい分野についても積極的に研究がおこなわれている。

本専修において研究されている倫理学には、倫理・道徳の本質や原理について考える理論倫理学とともに、特に生命の技術的操作の是非などといった、現代特有の倫理的問題について研究する応用倫理学も含まれる。

本専修で扱われる宗教学は、一般にはむしろ宗教哲学と呼ばれている分野であり、宗教の本質や、成立根拠について、哲学的・原理的な視点から解明することを課題とする。しかしその過程で、キリスト教や仏教などの代表的宗教に関する立ち入った研究ももちろん必要になる。

感性の学としての美学は、一方では人間の感情、情緒、センス等の機能やメカニズムに関する諸問題の、他方では狭義の感性的経験の相関者としての美的なものに関わる諸現象、すなわち芸術や美に関する諸問題の解明を目指すものである。

教育方針

一口に「哲学」と言っても、それが扱う領域は広大であり、問題の性質によって、必要とされる言語能力（英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語、ギリシャ語、等）や、前提とされる専門的知識も、まったく異なってくる。したがって、専修構成員の全員が集まっておこなわれる指導の機会だけに頼ってはいは、個々の大学院生の研究主題には即応しきれない。そこで、実質的な指導の大部分は、大学院生個人と指導教員とのあいだの個別指導によっておこなわれている。個別指導では、必要に応じて指導教員のもと、定期的に読書会等を開催し、実践的な探究の機会を設けるとともに、できるだけ頻繁に論文草稿の提出を求め、それを実際の論文にまで完成させるための具体的なアドバイスを与えている。

また、哲学専修では、他大学の研究者を招き、大学院生も参加して年に数回開催する「哲学研究会」を開催しており、大学院生が日ごろの指導とはまったく異なる視点からの啓発を受ける重要な機会を与えている。さらに、大学院生が自主的に開催する勉強会も、盛んにおこなわれている。

専修の特色

教室行事

博士前期課程では、年度初めのガイダンス、および後期におこなわれる修論中間発表会が、専修全体としておこなわれる修論指導の機会となっている。

博士後期課程に関しては随時、論文指導の機会が設けられている。各専門分野の教員による個人指導に加えて、教室全体での博士論文指導会も前・後期に各1回実施している。

さらに、年に数回開催する哲学研究会では、外部の研究者を招いての講演とあわせて、大学院生にも積極的に研究発表の機会を与え、本学教員以外の参加者から受けた論評を、論文完成のために生かすよう推奨している。

その他の特色

本専修の大学院生に見られる顕著な特徴は、社会人として長く活躍したキャリアをもちながら、さらなる学びを求めて志願する例が比較的多い、という事実である。哲学という学問の性格上、一定の人生経験を積んだ方々にとくに訴えるところが大きいように思われる。本専修には、開拓精神旺盛な若い人たちと、そうした年配の人たちとが、親しく議論を交わしながら互いに研究を高めあうという独特の雰囲気があり、それが本専修の大きな魅力のひとつとなっている。

哲学は、成果を出すまでに時間のかかる学問である。本専修の大学院生は、じっくりと思考を醸成することを重視する傾向が強い。短時間の多産性が評価されがちな現代の風潮に逆行するように見えるとはいえ、そうした研究姿勢こそ、本来の哲学に求められる重要な資質である。ここにも本専修の大きな特色があると言える。

所属教員

仲原 孝（宗教学、宗教哲学、近現代ドイツ思想史）

高梨 友宏（美学、芸術学、西洋近世哲学史）

土屋 貴志（倫理学、応用倫理学、人権論、道徳教育論）

佐金 武（分析哲学・現代形而上学）

<h2>仲原 孝 教授</h2>		NAKAHARA Takashi
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科	
宗教学・宗教哲学	学位 ▶ 博士(文学)	

【研究内容】

宗教とは何か、人間はなぜ宗教を必要とするのか、という問題について、哲学的に考察することをめざしています。その際の基本的な着眼点は、宗教と哲学とがもっとも深いところで共通の根をもっていることに注目することです。これまでの業績は、カント、シェリング、ニーチェ、ハイデガーといった、近現代ドイツ哲学に関するものが大半を占めていますが、それは、これら哲学者の思想をあくまでそれ自体として解明しながらも、しかも同時にそこに、宗教と共通する源泉をみいだすことができるにちがいない、という関心に導かれています。

【主要業績】

【著書】『ハイデガーの根本洞察』（昭和堂、2008）
 【論文】“Versuch einer Rekonstruktion von ‘Zeit und Sein’”, in: *Heidegger-Jahrbuch* 7. (Verlag Karl Alber 2013)
 「ツァラトゥストラとニーチェとの対話」（『人文研究』第60巻、2009）
 「ハイデガーのシェリング解釈」（『シェリング読本』法政大学出版局、1994）
 【翻訳】マルティン・ハイデッガー『カントの純粋理性批判の現象学的解釈』（ハイデッガー全集第25巻、創文社、1997、共訳）

<h2>高梨 友宏 教授</h2>		TAKANASHI Tomohiro
専門分野	最終学歴 ▶ 大阪大学大学院文学研究科	
美学・西洋哲学史	学位 ▶ 博士(文学)	

【研究内容】

研究上の関心は次の三方向に向かっています。すなわち、①芸術作品の美的体験や美的価値の意味、作品存在の本質等に関する現象学的アプローチ、②近代日本における美学思想の受容史に関する総合的考察、特に西田哲学における美や芸術の意味についての批判的考察、③西洋近代哲学における「感情(情念)」と美的なものとの関係に関する哲学・美学史研究、以上です。そして、これら三つの方向を「哲学的人間学としての美学」という構想のうちに体系的に関連付けて包摂することを、自分のライフワークと考えています。

【主要業績】

【著書】『美的経験の現象学を超えて—現象学的美学の諸相と展開—』（晃洋書房、2001）
 『思索の道標をもとめて—芸術学・宗教学・哲学の現場から—』（萌書房、2007、共編）
 【論文】“Die Philosophie Nishidas als eine “Kunstlehre”: Überlegungen zu Nishidas Beziehung zur Kunsttheorie Fiedlers” (*Aesthetics* No.7, 1996)
 「西洋近代美学の一概観」（松山壽一監修、加國尚志、平尾昌宏編『哲学の眺望』、晃洋書房、2009）

<h2>土屋 貴志 准教授</h2>		TSUCHIYA Takashi
専門分野	最終学歴 ▶ 慶応義塾大学大学院文学研究科	
倫理学	学位 ▶ 文学修士	

【研究内容】

(1) 倫理学はいかにして可能であるか、倫理学はいかなる方法をとらうのか、等に関する原理的哲学的考察（倫理学基礎論）。(2) 倫理学の事例研究としての応用倫理学、とくに医療倫理学（医療をめぐる倫理的問題の研究）。(3) 倫理学の実践としての人権問題研究および道徳教育研究。

【主要業績】

【著書】『七三一部隊と大学』（京都大学学術出版会、2022、共著）
 『医学研究・臨床試験の倫理 わが国の事例に学ぶ』（日本評論社、2018、共著）
 『「医学的無益性」の生命倫理』（山代印刷出版部、2016、共著）
 『医学研究』（シリーズ生命倫理学15巻、丸善出版、2012、共著）
 【論文】「倫理学するのに倫理思想研究は（なぜ、どこまで）必要か」（関西倫理学会『倫理学研究』第48号、2018）
 「日本国公認学校道徳教育と人権教育—『特別の教科 道徳』で人権教育が行えるわけ」（『唯物論研究』149号、2019）

<h2>佐金 武 准教授</h2>		SAKON Takeshi
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科	
分析哲学・現代形而上学	学位 ▶ 博士(文学)	

【研究内容】

時間とは何かをめぐる現代時間論の諸問題を中心に研究を続けています。とくに、(1) 時間の本性と事物の存在に関する形而上学においては、すべては現在にあるとする「現在主義」をベースとして、過去・現在・未来の区別や時間の流れといった概念の明晰化に取り組んでいます。また、(2) これらの哲学的問題が、相対性理論や量子力学といった現代の科学とどのように関係するかについても検討を重ねています。最後に、(3) 我々の時間経験に関する現象学とそこに定位する自己のあり方も主たる考察対象のひとつとしています。

【主要業績】

【著書】『時間にとって十全なこの世界—現在主義の哲学とその可能性—』（勁草書房、2015）
 【論文】“A Presentist Approach to (Ersatz) Possible Worlds.” (*Acta Analytica* Vol. 31(2), 2016)
 “Presentism and the Triviality Objection.” (*Philosophia* Vol. 43(4), 2015)
 「意識と時間—表象説からのアプローチ—」（『科学基礎論研究』、科学基礎論学会、2011、共著）

日本史学専修

哲学歴史学専攻

専修紹介

日本史学専修の特色・強みを三つの視点から紹介しましょう。

①教育・研究体制の幅広さ／本専修には、考古学・古代史・中世史・近世史・近現代史の5名の教員が在籍しています。考古学も含めて日本史全般に及ぶ幅広い体制を構築している大学は全国的に見ても少なく、大きな強みとなっています。たとえば、古代史を考古学の側面からも研究したり、中世考古学を学ぶにあたって文献史料のあつかいを学んだりできます。

②「都市」をはじめ、多彩なテーマに対応した教育・研究／本専修では、各教員が研究テーマの一つとして「都市」を対象としていることも特徴です。古代の都城、中世都市、近世・近現代の大阪（大坂）などをおして、時代を越えた歴史の大きな流れをつかんでもらうことができます。さらに都市史・地域史だけでなく、遺物論、政治史・社会史・文化史など多彩なテーマ・素材から日本史を総合的に研究する力を養えます。

③地域に根ざした教育・研究／本専修では、毎年夏に大阪府和泉市教育委員会と合同で「地域の歴史的総合調査」（合同調査）を実施し、教員・院生・学部生などが時代の垣根を越えた現地調査を行っています。旧家や寺社等に残された古文書の整理・撮影や、地元の方々への聞き取り、フィールドワークなど多岐にわたる研究実践の機会となっています。また今後は、大阪府・市の研究機関などとの関係もいっそう強化して、大阪の歴史・文化研究のセンターになるとともに、そうしたかかわりを生かした教育環境を整備してゆきます。

上記のような特色を持つ本専修は、全国的にもユニークな教育・研究の場として定評を得ています。本専修出身者の多くは、これまでも大学や博物館・資料館などに教員・学芸員として就職してきましたが、近年、そうした専門職に就く人の数は増加しています。

教育方針

古代から現代までの日本社会の歴史を学ぶとともに、自ら史資料を分析し研究する力量を身につけることをめざします。その際、考古学的遺跡・遺物、古文書、日記や記録、公文書、習俗・伝承など、さまざまな史資料を駆使して、政治史・社会史・都市史・文化史などの幅広い視野をもった歴史研究ができるようになることを目標としています。

博士前期課程（修士課程）では、自分の専門とする時代・分野のゼミだけでなく、別の時代・分野のゼミにも参加してください。さまざまな時代・分野に対応する力は、将来、大学・博物館や文化財保護にかかわる部署などに就職する際に、必ず求められるものです。博士後期課程では、自分の専門を深め広げる研究能力を身につけるための教育を行っており、学位（博士）取得を目標としてもらいます。

大学院の学びは、教員から院生に対する一方的な「教育」の場ではありません。合同調査は、地域の現場で生の歴史を調査し、ともに学ぶ機会となっています。教員・院生・学部生が一体となった時代・分野ごとの調査や研究会、合宿や遠足などが数多く開催されていて、通常の授業だけでは得られない、多くのことを学ぶことができます。院生それぞれの主体的な学修と、共同の営為としての歴史学とが結合した《学知》共同体を一緒にめざしましょう。

<https://www.omu.ac.jp/lit/nihonshi/>

専修の特色

教室行事

4月：新年度ガイダンス、5月：大阪公立大学日本史学会大会、学会誌の刊行、6月：歴史学合同ハイキング、7月：博士論文準備報告会、9月：和泉市教育委員会との合同調査（その後、年度末に報告書刊行）、各時代・分野ごとの合宿、史料調査、古墳の発掘・測量調査、11月：修士論文準備報告会、歴史学合同実習旅行、1月：修士論文締切、2月：修士論文口頭試問、歴史学合同院生研究発表会、3月：学位授与式、修了記念パーティー

出版物

1998年に教員、院生、学部学生、OB・OGからなる大阪市立大学日本史学会を設立しました。その会誌として『市大日本史』を刊行してきました（1～25号、1998～2022年）。査読付き学術雑誌で、教室出身研究者の代表的論文が載っています。また、教員全員が和泉市の市史編纂にかかわっています。合同調査の成果をもとに、『和泉市の歴史』（既刊は地域叙述編4冊、テーマ叙述編3冊）が刊行中です。

その他、教員が中心となって企画したシンポジウムなどをもとにした論集等も多数刊行されています。以下にその一部を挙げておきます。

仁木ほか監修『秀吉と大坂 一城と城下町-』和泉書院、2015年

佐賀ほか編『近世身分社会の比較史 一法と社会の視点から-』清文堂出版、2014年

岸本・磐下ほか『難波宮と大化改新』和泉書院、2020年

仁木・磐下編『歴史家の案内する大阪』文理閣、2021年など

その他の特色

本専修では、大阪歴史学会、大阪歴史科学協議会などの事務局を一定期間ごとに担当しています。また教員がさまざまな学会の委員長に就いたり、院生が学会の委員をつとめるなど、近畿地方の日本史研究の拠点となっています。さらに海外の大学（イエール大学、シンガポール国立大学、上海大学など）の日本史研究者と恒常的な研究交流を行っており、大学院生が留学したり、海外で研究発表する機会も少なくありません。

所属教員

仁木 宏（中世史、都市史・地域社会史ならびに戦国大名権力の研究）

岸本 直文（考古学、前方後円墳の研究）

佐賀 朝（近現代史、都市史・遊廓社会史・戦時社会史の研究）

磐下 徹（古代史、郡司制度の研究）

齊藤 絃子（近世史、藩領社会・都市大坂の研究）

<div><div></div>佐賀朝 教授</div>	<div>SAGA Ashita</div>
専門分野	最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科
日本近現代史	学 位 ▶ 博士（文学）

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>【研究内容】</div>	<div>メッセージ・教育方針</div>
<div> <p>現在の研究テーマは、四つである。①近代大阪の都市社会史研究。近代大阪の都市社会を構成した、多様で個性的な地域社会を具体的に明らかにしてきた。居留地や工場地域、スラムや遊廓地のほか、近年は市場社会にも関心を広げつつある。関連して、1920年代の都市社会政策・住宅政策や方面委員制度に関する業績もある。②「遊廓社会」史研究。近世～現代を視野に、日本列島各地の様々な遊廓の比較類型史的研究を進めている。③戦時下の社会についての研究。「十五年戦争」期の国民動員政策が地域社会や市民生活に及ぼした影響とそれに伴う社会変容について、軍事援護を主な素材に論じている。④近代和泉地域の研究。近代和泉地域に普及した綿織物業の実態と生産・流通構造や地域社会との関係について現地調査を進め、和泉市史などで叙述している。</p> </div>	

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>【主要業績】</div>	
<div> <p>〔著書〕『近代大阪の都市社会構造』（日本経済評論社、2007）</p> <p>〔共編著書〕『シリーズ遊廓社会 1 三都と地方都市』（吉川弘文館、2013）</p> <p>『シリーズ遊廓社会 2 近世から近代へ』（吉川弘文館、2014）</p> <p>〔論文〕「居留地付き遊廓の社会構造―東京築地・新嶋原遊廓を素材に―」（『部落問題研究』203号、2013）</p> <p>“Urban Lower-Class Society in Modern Osaka”, (英訳 ジョン・ポーター) (<i>City, Culture and Society</i> Vol.9, 2012)</p> <p>“Lien social et sociétés locales dans les villes du Japon moderne. Les associations d’ habitants et les travailleurs défavorisés d’ avant-guerre à Ōsaka” (フランス語訳ギョーム・カレ) (<i>Histoire Urbaine</i>, No.55, 2019)</p> </div>	

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>磐下徹 准教授</div>	<div>IWASHITA Toru</div>
専門分野	最終学歴 ▶ 東京大学大学院人文社会系研究科
日本古代史	学 位 ▶ 博士（文学）

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>【研究内容】</div>	<div>メッセージ・教育方針</div>
<div> <p>奈良・平安時代を中心とした日本の古代史を専門としている。主な研究テーマは、古代の地方行政の末端を担った郡司の研究で、郡司を切り口に、古代国家の地方支配や地域社会の在り方を考察している。近年では、大阪周辺地域の古代史研究にも取り組んでいる。</p> <p>また、平安時代の貴族の日記の読解・註釈も行っており、当該期の政治・行政システムを分析している。</p> <p>両テーマともに、一つ一つの史料を丁寧に考察すると同時に、日本の古代国家像を複眼的に明らかにしていくことを目標に研究を進めている。</p> </div>	

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>【主要業績】</div>	
<div> <p>〔著書〕『日本古代の郡司と天皇』（吉川弘文館、2016）</p> <p>『藤原道長辞典』（思文閣出版、2017、共著）</p> <p>〔論文〕「前期難波宮の朝堂院－孝徳朝の「官僚制」－」（『難波宮と古代都城』同成社、2020）</p> <p>「袴袂遺跡出土延喜6年禁制木簡についての一考察」（『古代文化』72-2、2020）</p> </div>	

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>仁木宏 教授</div>	<div>NIKI Hiroshi</div>
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科
日本中世史	学 位 ▶ 博士（文学）

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>【研究内容】</div>	<div>メッセージ・教育方針</div>
<div> <p>日本中世の都市史、地域社会史を研究している。中世都市は、京都、寺内町、「山の寺」、港町、城下町など、多様でバラエティに富むことが特徴である。これらの都市の変遷を実証的・理論的に解明してきた。また全国規模の流通の中での都市構造についても研究を進めている。文献史学のみならず、考古学、歴史地理学、建築史学（都市史学）などとの学際的研究にも取り組んでいる。さらに近畿地方を中心とする地域社会についても研究を深め、社会の全体構造を立体的に解明してきた。社会のあり方が、大名や統一政権をどのように規定しているのかという視角から権力にも注目し、中世社会の変容を構造的にとらえることも試みている。平安京・京都研究集会、1617会などの研究集会を主催し、科学研究費などを活用することで、日本中世史研究全体の活性化にも寄与したい。</p> </div>	

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>【主要業績】</div>	
<div> <p>〔著書〕『戦国時代、村と町のかたち』（山川出版社、2004）</p> <p>『京都の都市共同体と権力』（思文閣出版、2010）</p> <p>〔共編著〕『近畿の名城を歩く』（吉川弘文館、2015）</p> <p>『飯盛山城と三好長慶』（戎光祥出版、2015）</p> <p>『天下人信長の基礎構造』（高志書院、2021）</p> </div>	

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>岸本直文 教授</div>	<div>KISHIMOTO Naofumi</div>
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科
日本考古学	学 位 ▶ 博士（文学）

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>【研究内容】</div>	<div>メッセージ・教育方針</div>
<div> <p>古墳時代の研究、とくに前方後円墳など古墳にもとづく社会関係を追究している。3世紀～6世紀の古墳時代400年間は、農耕社会の定着の上に、倭王権が生まれ国家形成に進む時代である。列島規模の関係が生まれていることは、前方後円墳の共有を典型とする古墳の築造に示されるが、それは倭国王墓を頂点とする身分的秩序を表し、この時代の国家体制の基軸であった。弥生時代の終末からいかに倭王権が生まれるのか、できあがった倭国は、東アジア情勢の影響を受け、また不安定な王権は政治変動を繰り返すが、次第に中央権力が卓越していく、そうした過程を古墳から具体的に解明することをめざしている。また近年は、中央権力の卓越の上に前方後円墳の築造が廃止され、墳墓の築造を規制していく6世紀末から7世紀の、古墳の終焉に取り組んでいる。また、難波宮や条里制についても研究している。</p> </div>	

<div><div></div></div>	<div></div>
<div><div></div>【主要業績】</div>	
<div> <p>〔著書〕『史跡で読む日本の歴史 2 古墳の時代』（吉川弘文館、2010、編著）</p> <p>『和泉郡の条里』（和泉市史紀要）第19集（和泉市教育委員会、2012、編著）</p> <p>『倭王権と前方後円墳』（塙書房、2020）</p> <p>〔論文〕「炭素14年代の検証と倭国成立の歴史像」（『考古学研究』62-3、2015年）</p> <p>「倭王権と倭国史をめぐる論点」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集、2018）</p> </div>	

齊藤 紘子 准教授

SAITO Hiroko

専門分野

日本近世史

【研究内容】

近世地域社会の解明に取り組み、和泉国に在所を置いた譜代大名の陣屋や、陣屋元村の都市性、藩領村々の社会構造について研究してきた。近年では、藩領の地域社会だけでなく、幕府職制との関係にも注目し、特に大坂城の警衛について、警衛を担当する家臣団の編成や、大坂城周辺の武家地と町方社会の関係、武家奉公人の調達構造などの実態を、都市社会史の視点から分析している。さらに、共同研究として摂津国難波村成舞家文書を読む会などに参加するほか、京都・洛北地域での史料調査・研究も進めており、大坂・京都の都市史・近郊地域史にも関心を拡げている。これらの検討を通じて、村町や大名の家臣団など、多様な社会集団によって構成される近世の都市社会・地域社会の特質を、具体的に解明することをめざしている。

【主要業績】

〔著書〕『畿内譜代藩の陣屋と藩領社会』（清文堂出版、2018）

〔論文〕「大坂城の定番家臣団と都市社会」（『論集三都 大坂巻』東京大学出版会、2019）

「近世中期伯太藩における村落社会と領主支配 — 泉州上神谷郷を対象に一」（『ヒストリア』247号、2014）

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士（文学）

メッセージ・教育方針

日本近世史の特徴は、様々な身分・階層の人々が書き記した史料群が、いまなお豊富に残されている点であろう。史料群の全体像をつかみつつ、一点一点の史料を丁寧に解釈し、近世社会の実態を具体的に明らかにする力をつけてほしい。一方で、そうした史料群のなかには、現代の都市開発や過疎化、大規模災害などの影響を受け、散逸・滅失の危機にあるものも増えている。研究だけでなく、史料調査などの活動にも積極的に関わり、現代社会で日本近世史を学ぶ意味について、主体的に考えてほしい。



高槻 寿美 TAKATSUKI Sumi

大阪府立高等学校教諭
哲学歴史学専攻 2019年度前期博士課程修了

所属

哲学専修

研究テーマ

フランクルの他者論に基づく「教師 - 生徒」関係

修士論文題目

教師の自己超越 — 生徒の「もとに在る」こと —

文学研究科を選んだ理由

私は高校教師として30年近く生徒に関わってきました。これまでの生徒への関わりを振り返った時、それが純粋に生徒のためのものであったと言えるのか、という疑問にぶつかりました。自分の考えや期待を生徒に押しつけていたのではないだろうか、生徒のためと言いながら自分自身の自己実現を目指していたのではないだろうか、という疑問です。このような疑問がきっかけとなり、私は一旦教育現場を離れ、教師としての自分自身の在り方を見つめ直したいと考えました。そして大阪府公立学校教員長期自主研修制度を利用し、大阪市立大学大学院文学研究科哲学専修にて哲学を学ぶ決心をしました。

市大文学研究科を選んだ理由は、こちらでは様々な分野の研究の機会が提供されているということです。私の関心は哲学と教育学にありましたが、哲学を学びながら最新の教育学の動向についても情報を得ることができるのではないかと考えました。実際、教育学の授業にも参加させて頂くことができ、哲学における自身の研究にとって大きな刺激となりました。市大文学研究科を選んだもう一つの理由は、自身が市大生活科学部出身であるということです。社会人学生として懐かしい母校で再び学べるということは私にとって大きな喜びでした。また母校に戻ったという安心感の中、伸び伸びと研究に打ち込むことができました。

研究内容

私の研究内容は、ヴィクトール・E・フランクルの他者論に基づき、教師がいかに生徒の実存実現に専心することができるかについての解明です。フランクルは人間と他の存在者との関係構築についての深い洞察を持ち、その存在論的關係の在り方を「もとに在る」(Bei-sein) ことと名づけています。私の研究目的は、この「もとに在る」理論を正しく理解し、その理論に基づいて教師 - 生徒関係を考察することです。2年という限られた時間内で十分な研究ができたとは言えませんが、個々の生徒の持つ可能性を信じ、教師自身が正しいと考える関わりを最後まで続けることが重要であるという結論に達しました。

文学研究科での学び

私は哲学を学ぶことが初めてだったこともあり、学部生の方の授業に参加させて頂いたり、他の院生の方と一緒に演習に参加して頂いたりしました。また読書会にも参加させて頂きました。このような環境の中で、ある事象について哲学的に考えるとはどういうことが少しずつ理解できるようになりました。そして修士論文につきましては、入学当初から手厚く温かいご指導を頂き完成させることができました。指導教員の先生をはじめ、哲学教室の先生方、そして学生の方々にはいくら感謝しても感謝しきれません。

私は教育現場に戻りますが、哲学教室で培った態度を活かし、ある事象が起こった際には、自己の偏った見方に固執するのではなく、あらゆる観点からその事象について考察することを心がけたいと思います。そのような態度が真の生徒理解に繋がると確信しています。受験を考えておられる方々、特に社会人の方々には、様々な制約があるとは思いますが、是非市大文学研究科にてご自身の研究を進めて頂きたいと思います。



東洋史学専修

哲学歴史学専攻

専修紹介

東洋史学専修は、中世から近代までの中国史、近世・近代の中東・西アジア史、中央ユーラシア史を中心に、アジア諸地域の歴史を幅広く研究対象としている。本専修では、教員や大学院生個々人がそれぞれの対象地域の研究に、社会や政治、経済や文化など、様々な観点から取り組むとともに、マクロな視点から人類社会の歴史構造に迫ろうとしている。

本専修の研究者は、それぞれの関心に応じて、種々多様な形式で、様々な言語で表された原典史料を用い、複眼的に歴史事象にアプローチしている。具体的には、中国の古代出土史料、正史や実録、文集、族譜、裁判資料、民国期の現地調査資料、王統系譜、政府刊行物、会計帳簿、科挙の問題と答案、随筆、オスマン・トルコ語やアルメニア語、ロシア語の中央政府行政文書や請願書、歴史的刊行物、ヨーロッパ諸国の外交文書といった文字史料、さらには絵画や口述史料、現地調査で得られた情報が挙げられる。そしてこうした諸史料から得られた情報を、政治学や経済学、宗教学、社会学といった隣接諸学問の成果を踏まえて分析することで、アジア諸地域の歴史と、それを取り巻く世界史像を描くことを目指している。

教育方針

本専修における研究の指導は、中国史、イスラム史、中央ユーラシア史といった個別領域での研究の深化と、他地域を扱う研究者からの助言や批判を通じてなされる相対化という二つの段階を交互に積み重ねることから成り立っている。前者に関しては、教員個々の演習を通じた史料の読解や分析、論文の個別指導に加え、本専修の教員が中心となって開催される、宋代史談話会といった研究会、オスマン史料講読会などの勉強会を通じてなされる。また、本専修に所属する大学院生は、それぞれの専門分野に応じて学会や研究会に積極的に参加し、学外の研究者と積極的に交流を持つことが期待される。後者に関して言えば、東洋史学専修の教員と大学院生全員が参加する演習および、西洋史学、日本史学専修と合同で例年二月に開催される研究報告会を通じてなされる。こうした場において、研究関心の近い教員、大学院生だけでなく、他地域を扱う研究者からも助言や批判を得ることで、本専修の大学院生は、より大きな文脈に研究成果を位置づけることを目指すと同時に、幅広い視野からアジア諸地域の歴史像を描くことに取り組むことになる。

専修の特色

教室行事

東洋史学専修では、専修に所属する教員、大学院生全員が参加して行う研究発表会を随時開催し、各大学院生が年に2回程度、研究の進捗状況を報告する機会を設けています。例年2月には、日本史学および西洋史学専修と合同で、博士前期課程在学者の研究発表会を行っています。

また、やはり日本史学および西洋史学専修と合同で、6月には新歓ハイキング、11月には歴史学合同実習旅行を、3月には卒業・修了記念パーティーを行っています。

その他の特色

東洋史学専修には、大学を卒業してそのまま進学した人だけでなく、社会人経験者が多く、研究分野の性格から留学生も多数在籍している点を特徴としています。また、教員はみな研究対象地域など海外で研究・調査した経験が豊富です。多様な文化・経験を有する構成員がお互いに学びあうことができる、そんな環境が東洋史学専修の魅力の一つです。

なお本専修では、機関誌として『大阪公立大学東洋史論叢 (OMU ASIAN HISTORY)』を発刊しています。本誌は、東洋史が研究対象とする中国・西アジア・中央ユーラシア諸地域の歴史を扱う研究論文、翻訳、書評、学界展望などが掲載された学術雑誌です。主に学外・学内の諸先生・大学院生・卒業生が執筆し、現在第22号まで刊行されています。

所属教員

平田 茂樹 (中国近世史)

渡辺 健哉 (中国近世近代史)

濱本 真実 (中央ユーラシア史、ロシア史)

上野 雅由樹 (オスマン帝国史、アルメニア史)

<h2>平田 茂樹 教授</h2> <p style="text-align: right;">HIRATA Shigeki</p>	
<p>専門分野</p> <p>中国近世史</p>	<p>最終学歴 ▶ 東北大学大学院文学研究科</p> <p>学位 ▶ 博士（文学）</p>

【研究内容】

研究内容は中国の宋代を中心に、政治史、社会史、文化史など幅広く研究を行っています。政治史については従来の実証的な政治史の方法論にとどまらず、システム、空間、時間、過程、ネットワーク、コミュニケーションなどをキーワードとして、「誰が、いつ、どこで、どのように政治に関わっていくのか」という観点から政治の奥深い姿の解明に努めています。また、近年は「科挙社会」をキーワードとしながら、宋代の社会がどのように展開していたのか、社会史、文化史的なアプローチを進めています。

【主要業績】

【著書】『科挙と官僚制』（山川出版社、1997）『宋代政治結構研究』（中国・上海古籍出版社、2010）『宋代政治構造研究』（汲古書院、2012）『宋代社会的空間と交流』（中国・河南大學出版社、2008、共編）『文書・政令・信息溝通：以唐宋時期為主』（中国・北京大学出版社、2012、共編）『過程・空間：宋代政治史再探研』（中国・北京大学出版社、2017、共編）

<h2>渡辺 健哉 教授</h2> <p style="text-align: right;">WATANABE Kenya</p>	
<p>専門分野</p> <p>中国近世近代史</p>	<p>最終学歴 ▶ 東北大学大学院文学研究科</p> <p>学位 ▶ 博士（文学）</p>

【研究内容】

元代を中心とした北京の歴史を研究しています。北京はモンゴル時代から現代にいたるまで都であり続けます。世界史上でも、これほど長期にわたって、同一の場所が都である例は他にありません。北京が都であり続ける理由はいかなるものなのでしょう。その点を明らかにすべく研究を行っています。また同時に、仏教学者である常盤大定（1870-1945、元東京帝国大学教授）の活動を通して、日本と中国との学術交流史、また近代日本における仏教学の展開に関する研究も行っています。

【主要業績】

【著書】『元大都形成史の研究——首都北京の原型』（東北大学出版会、2017、単著）『教養の中国史』（ミネルヴァ書房、2018、共著）『元朝の歴史：モンゴル帝国期の東ユーラシア』（勉誠出版、2021、共編著）『村上専精と日本近代仏教』（法蔵館、2021、共著）『東アジアの展開：8～14世紀』（岩波書店、2022、共著）

<h2>濱本 真実 教授</h2> <p style="text-align: right;">HAMAMOTO Mami</p>	
<p>専門分野</p> <p>中央ユーラシア史、ロシア史</p>	<p>最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科</p> <p>学位 ▶ 博士（文学）</p>

【研究内容】

草原の遊牧民と、オアシスの定住民との関係を軸に展開する中央ユーラシアの歴史、および、中央ユーラシアと長期にわたって深く関わりあってきた、ロシアの歴史を研究しています。研究テーマは、中央ユーラシア西部のムスリムと、ロシアのキリスト教正教徒との関係です。イスラームとキリスト教正教という二つの宗教の間で、政治や社会がどのように動いていたのか、という問題や、両信仰圏にまたがって活躍したタタール商人の活動について、研究を進めています。

【主要業績】

【著書】『「聖なるロシア」のイスラーム：17・18世紀タタール人の正教改宗』（東京大学出版会、2009、単著）『共生のイスラーム：ロシアの正教徒とムスリム』（山川出版社、2011、単著）『*Volgo-Uralskii region v imperskom prostranstve XVIII-XX vv.*』（『18-20世紀の帝國的空間におけるヴォルガ・ウラル地方』）、Vostochnaia literatura、2011、共編著）『テュルクを知るための61章』（明石書店、2016、分担執筆）

<h2>上野 雅由樹 准教授</h2> <p style="text-align: right;">UENO Masayuki</p>	
<p>専門分野</p> <p>オスマン帝国史</p>	<p>最終学歴 ▶ 東京大学大学院総合文化研究科</p> <p>学位 ▶ 博士（学術）</p>

【研究内容】

多様な文化的背景を持った人々が織りなすオスマン帝国の社会と政治を、キリスト教徒を取り巻く動向と彼ら自身の活動に注目し、トルコ語とアルメニア語の文書や新聞、イギリスの外交文書といった史料を用いて研究しています。これまでは、19世紀のアルメニア人の事例を中心に、宗派共同体と総主教座、「ミット制」議論、非ムスリムのオスマン官界参入といったテーマを扱ってきました。最近では、オスマン帝国をめぐる国際的な環境を視野に入れつつ、非ムスリムをめぐる制度的枠組みの展開の解明に取り組んでいます。

【主要業績】

【著書】『世界史／いま、ここから』（山川出版社、2017、共著）『西アジア・南アジアの帝国：16～18世紀』（岩波書店、2023、共著）

【論文】“Empire as a Career: Hagop Grijigian or an Armenian in the Ottoman Bureaucracy” (*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, vol. 76, 2018)

“In Pursuit of Laicized Urban Administration: The Muhtar System in Istanbul and Ottoman Attitudes toward Non-Muslim Religious Authorities in the Nineteenth Century” (*International Journal of Middle East Studies*, vol. 54 (2), 2022)

西洋史学専修

哲学歴史学専攻

専修紹介

西洋史学専修は、文学研究科の改革により2001年度より新たに設けられました。文学研究科の中では歴史の浅い専修に属します。そのため当初は他専修に比してややこじんまりしていましたが、近年は院生も増え内部は活気にあふれています。2020年4月現在、西洋史研究室には指導教員が3名、博士前期・後期課程の大学院生およびODが総勢15名近くいます。指導教員のうち、北村昌史教授はドイツ近現代史を、草生久嗣教授はビザンツ史を、向井伸哉准教授はフランス中世史を専攻しています。これまで院生およびODの研究領域としては、教員と同じく中世史、ドイツ現代史、ビザンツ史を研究している者から、カタルーニャ中世史、アフリカ現代史、バルカン現代史、アメリカ独立革命史、ポスト・ビザンティン美術史、ロシア帝国史まで多彩です。西洋史学専修の院生室は、おそらく文学研究科の中でもっとも多く言葉が飛び交い、世界各地の多様な文化が出会う場といえるでしょう。

教育方針

西洋史学専修では、西欧・東欧・地中海地域からアメリカ合衆国にわたる諸社会の特質を、歴史的分析の手法を用いて学ぶとともに、自ら研究する能力を身につけることをめざします。西欧近代諸語の講読を通じて研究文献や史料の読解能力を養うとともに、古代・中世史の場合はギリシア語・ラテン語史料の読解力の養成に努めます。本専修では教員の専攻・図書とともに、ビザンツ史、イタリア史など、他大学ではあまり類のない分野が充実しているのが大きな特徴といえます。しかしもちろん、これ以外の伝統的な西洋史諸分野での研究・教育にも力を入れています。

博士前期課程修了後は、多くの方が本研究科の博士後期課程に進学します。博士後期課程進学後は、海外の大学へ留学する人が少なくありません。これまでロシア、オーストリア、イタリア、イギリス、ドイツなどに留学しています。

博士前期課程のカリキュラムは大きく時代順に構成されています。講義は古代史、中世史、近現代史について広く学べるよう組んであります。演習では西欧諸国語による研究書講読や、ギリシア語・ラテン語の史料講読を通じて、テキストを正確に読解する力をつけます。さらに研究指導を通じて修士論文の作成をしっかりと指導します。さらに教員と大学院生によるラテン語・ギリシア語・ドイツ語の読書会が開かれ、修士論文の作成前には博士前期課程2年の院生だけの自主ゼミなども行われています。博士後期課程では、教員の個人指導の下に論文執筆や学会発表を行い、課程博士論文を完成することをめざします。博士後期課程の院生は、すでに多くの学会で発表し、学術雑誌に論文を掲載しています。西洋史学専修はこれまでに2名の課程博士と5名の論文博士を送り出しています。

専修の特色

教室行事

研究に関しては大学院博士前期課程、博士後期課程、およびODによる研究発表会を年に数回程度開催しています。また、博士前期課程については日本史学専修および東洋史学専修と3専修の合同で研究発表会をおこなっており、そこには博士後期課程の大学院生も参加しています。教室旅行やハイキングなどもこの3専修合同で行うなど、歴史学として密接な関係を保ちながら運営されています。

その他の特色

各教員の研究分野に応じて日本国内のビザンツ史、中世史、ドイツ史関係の全国学会および地方研究会と深い関わりがあり、学生の皆さんの日本ビザンツ学会、西洋中世学会、ドイツ現代史研究会への積極的な参加を支援します。専修内の研究会・勉強会活動として文学研究科プロジェクト、ビザンツ研究連絡会、ドイツ語講読会、中世ラテン語古文書翻刻会などが開催されています。また将来、学内および国際的な連携とともに、独自の研究センターや雑誌を立ち上げるのが西洋史学専修の夢です。

所属教員

北村 昌史 (近現代ドイツ社会史、ブルーノ・タウト研究、日本・ヨーロッパ交流史)

草生 久嗣 (ビザンツ史、宗教社会論、異端学)

向井 伸哉 (フランス中世史、村落史、国制史)

<h2>北村 昌史 教授</h2>		KITAMURA Masafumi
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科	
近現代ドイツ社会史	学 位 ▶ 博士(文学)	

【研究内容】

19世紀ベルリンの都市社会史研究を出発点として、現在は、ナチス政権成立とともに日本に亡命してきたブルーノ・タウトがベルリンで設計したジードルング(住宅地)を題材に、ヴァイマル期ドイツの社会史に取り組んでいます。この時期、欧米諸国では機能性・合理性を追求した「モダニズム建築」による住宅建設が積極的に進められ、新しい生活様式がもたらされます。こうした新しい生活文化の出現を実証的にたどりつつ、タウトの日本文化論や日本における「モダニズム建築」の導入の研究を通じてヨーロッパと日本の交流史にも取り組んでいます。

メッセージ・教育方針

歴史研究というのは、過去の特定の時代・地域で起こったことをきちんと把握し、それを現代のわれわれにも理解できるように説明することです。そのために史料を正確に読み解き、先行研究をきちんと読んで自分の意見を明確にする能力を身に付けていただくことが、私の教育方針の基本といえます。

【主要業績】

【著書】『ドイツ住宅改革運動 ―19世紀の都市化と市民社会』（京都大学学術出版会、2007）

【論文】“Forest Settlement by Bruno Taut in Past and Present”, in: *UrbanScope*, 9, 2018.

「日本の大学キャンパスからみた世界の歴史―関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスと大阪市立大学杉本キャンパス」（『関学西洋史論集』41, 2018）

「ブルーノ・タウトに関する研究の動向」（『史林』100-3, 2017）

<h2>草生 久嗣 教授</h2>		KUSABU Hisatsugu
専門分野	最終学歴 ▶ シカゴ大学大学院社会科学部歴史学科	
ビザンツ帝国史、古代地中海史	学 位 ▶ Ph.D. (History)	

【研究内容】

中世ヨーロッパと地中海、とくにビザンツ帝国(ローマ帝国中世東方領)の政治宗教問題を専攻しながら、中世における「異端視」の構造を明らかにする研究(『異端学』)に取り組んでいます。有名な異端審問や魔女狩りといった出来事は、なぜかビザンツ世界においては見られません。そのビザンツの舞台、アフリカ、中東やスラヴ世界とも交錯した東地中海世界(オイクメネー)の本質を問うことをマクロなテーマとし、一方でその認識が記録された諸文献史料(Heresiology)の解析をミクロなテーマと位置づけています。

メッセージ・教育方針

文明の十字路口にあったビザンツ帝国を専門とするため、多くの時代・地域・言語・学問分野との交流を大事にしています。ビザンツ学専攻希望者にはもちろんのこと、世界史やヨーロッパ文化、キリスト教やイスラームに惹かれた初学者にも、国際性・知的最先端を見すえて計画された大学院プログラムを提供します。

【主要業績】

【論文】「『ビザンツ』帝国の「ローマ」人：アイデンティティの射程」（『西洋中世研究』7号, 2015）

「合同生活圏のビザンツ帝国とコンスタンティノープル」（神崎忠昭・長谷部史彦編著『地中海圏都市の活力と変貌』慶応義塾大学文学部, 2021）

“Seminaries, Cults, and Militia in Byzantine Heresiologies: A Genealogy of the Labeling of ‘Paulicians’”, in *Radical Traditionalism, The Influence of Walter Kaegi in Late Antique, Byzantine, and Medieval Studies*, edited by D. Olster and Ch. Raffenerperger, Lexington Books, 2018.

<h2>向井 伸哉 准教授</h2>		MUKAI Shinya
専門分野	最終学歴 ▶ トゥールーズ第二大学(フランス)	
フランス中世史	学 位 ▶ Doctorat(Histoire)／博士(歴史学)	

【研究内容】

中央集権が徹底された現代世界とは異なり、最も身近な地方政府たる村落に統治権が集中していた中世世界で、住民は村落自治に積極的に関わっていました。西洋における民主主義の源流は、奴隷制に立脚した古代都市アテナイや自由人の宣誓共同体として成立した中世都市にしばしば求められてきましたが、自由身分の住民で構成される人口規模の小さな中世村落で展開された自治こそ、ヨーロッパ史上、最も直接民主主義に接近した政治体制であったことは疑いえません。中世村落における住民自治の実態は如何なるものだったのでしょうか?南仏ペジエ地方をフィールドに、中世世界で展開された村落住民による自己統治の全体像を解明していきます。

メッセージ・教育方針

歴史学の効用は、一知半解に物事を単純化するのではなく、その複雑さや異質さを前に考え立ち止まり続けられる知的忍耐力を養うことと、複雑な事象や異質な他者をありのまま理解できるよう個人の認識枠組みを拡張させることにあります。講義やゼミを通じて、①史料が発する思想・背景の異なる他者の言葉にじっくり耳を傾け、世界観の異なる人々と対話を行っていくうえで必要な能力を鍛え、②過去と現代の比較を通じて人間社会に対する普遍的なりテラシーと批判的思考力を養い、③人類史の大きな流れを把握し、現代社会を理解する長期的視野を手に入れることを目指します。

【主要業績】

【論文】「中世後期南フランスにおける都市と農村の政治的關係―ペジエの都市エリートとヴァンドレスの村落共同体（一三五〇―一四〇〇）―」（『史学雑誌』, 127 卷10 号, 2018）

「ルイ9世期南仏ピテロワ地方における国王統治」（『西洋中世研究』, 2号, 2010）

“Les relations politiques entre ville et campagne dans la seconde moitié du XIVe siècle : les élites urbaines de Béziers et la communauté villageoise de Sérignan (Hérault)” (*Revue historique*, no. 688, 2018)

“Une communauté villageoise face à l’insécurité : la défense de Sérignan (Hérault) dans la deuxième moitié du XIVe siècle” (*Annales du Midi*, no. 294, 2016)